

●T2裏路地探険 参加募集

平成28年7月9日(土) 時間未定
「城崎温泉街を歩く」豊岡市城崎町湯島

※100号特別企画のため、人数が多い場合は抽選になる可能性があります。ご了承ください。

*上記実施日の10日前までに、18ページに掲載の但馬の情報誌「T2」編集部まで、住所・氏名・年齢・電話番号・「T2裏路地参加希望」とお書きの上、ハガキで申し込みたい。開催当日は午前中、現地集合・現地解散となります。申込締切後、参加ご希望の方へ郵送にて案内を送付します。



夏は水平線に沈む夕日が美しい

海を望む海産物店や飲食店が並び。

平成9年まで小学校には巨松「燈籠の松」があった。大昔はこの辺りは砂浜であり、七日市から一日市にかけての浜一帯は「千本松原」と呼ばれるほどの松林があった。

至香住駅・余部地区・新温泉町方面



焼き板塀の家々が連なるまち並み

当時、船員の給料がどの職業よりも高く、一晩で数千万円を稼ぐ船もいたとか。漁師になれば、2、3年で家を建てられたと言う。

魚も豊富に獲れたそうで、「香住駅へとサバを運ぶリヤカーの列ができた」や、「貨物列車が雪で運休になると、駅の上屋にカが山積みになって無料配布された」など、豪快なエピソードには事欠かない。

煌々と光るイカ釣り船の漁火を見て、出張中の会社員がタクシー運転手にあの繁華街まで行ってくれと頼んだという笑い話もある。

「カニや魚をお供え物にいただくこともあり、幼い頃から海の幸には恵まれていましたね。水産物の加工屋さんが増えて、漁業で町は賑わっていました」と、田淵さん。

時代の変化により漁業を取り巻く環境は厳しいが、今でも海岸沿いには加工屋さんや軒を連ね、魚を知り尽くした海の職人たちが美味しい香住の魚を届けている。

路地に入ると、漁師町特有の焼き板塀の家々が残る香住の町。海岸沿いは「しおかぜ香苑」として整備され、遊歩道は潮風が心地よい。夏は水平線に沈む夕日のシルエットがおすすすめ。海の香りが住む町をのんびり散策してほしい。

裏路地探険

海とともに生きる漁業の町・香住を歩く／香美町香住区香住

漁業の町として、一大発展した香住の町
海へと続く路地には漁師町の風情が残る
往時の様子をたどりながら海辺を歩く…

「香住」と言えば、言わずと知れた漁師町。冬の松葉ガニを始め、イカ、カレイ、ハタハタ、ニギスなど、一年中多彩な魚介類が水揚げされる。近畿では唯一の水揚げ港である紅ズワイガニは、「香住ガニ」と銘打ってブランド化され、新たな市場産品として人気が高まっている。

縄文前期までは、内陸の谷まで海が入り込んでいた香住。縄文中期以降に平野が形成されて人の営みが始まったことが、町内の月岡下遺跡の発掘調査により分かった。

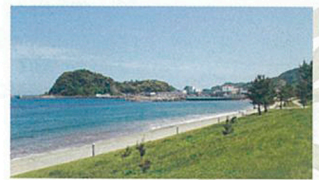
古地図では、現在の香住谷川は矢田川の主流だったとされ、天慶3年(940)に、時の領主・篠部氏が今の西側に流れを付け替え、その跡地に香住谷川と耕地が作られたとされる。海辺には遠浅の砂浜が広がり、「千本松原」と呼ばれる松林が広がっていた。



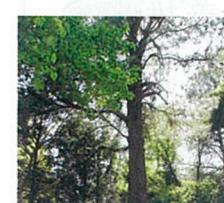
金刀比羅神社は「こんびらさん」として親しまれ、海の守護神・大漁祈願の神様として、漁業関係者の信仰が篤い。かつては香住谷(糸谷)に鎮座し、明治4年に現在地に遷座した。



金刀比羅神社に残されている「漁師さんの三種の神器」。左から「具箱(道具箱)」「チゲ(弁当箱)」「みず樽(水筒・飲料水)」。



しおかぜ香苑から香住漁港西港を望む海辺の風景。香住漁港は初代漁業組合長の長瀬(ちようひろし)と、その遺志を継いだ3代目組合長で息子の耕作の尽力により、昭和4年、大型船が係留できる近代的な港へと整備された。港は高度経済成長期とともに隆盛を極め、漁業の町として発展を遂げた。



月岡公園には「有馬(間)皇子夫婦塚」があり、伝承では謀反の疑いかけられた皇子が香住に逃げ延び、同地に葬られたと言われているが定かではない。古来より神聖な木とされる「三鉢の松」が植えられている。



中央公民館の玄関横に展示されている「燈籠の松」の切り株。樹齢は約550年とされ、平成9年まで永く小学校のシンボルであった。「千本松原」の名残りの松と言われ、盆や法事の際、枝に燈籠が吊り下げられたことからその名が付いた。



香住自治区の氏神である「香住神社」。氏子は380戸を数え、毎月1回各組が持ち回りで清掃奉仕をしている。年6回、例大祭があり、特に秋祭りは大きな御神輿2体が町中を練り歩く。香住文化会館駐車場では町指定無形民俗文化財の「三番曳」が奉納される。参道を上った月岡公園は桜の名所として知られる。

「今も町内には内陸部まで海だったと示す場所があります。河口の先端であった「神岬」と言われる場所で、かつて「矢防ぎの松」と言われた名残りの大松がありました」とは、地元・金刀比羅神社の宮司を務める田淵義親さん。

古地図に記された「神岬」には、有間皇子の弟とされる表米親王が海賊退治の折、鮑が沈みかけた船の穴をふさいで助けたという伝承があり、ひと息つくために飲んだとされる「磯の生水」の名が残っている。

昭和4年(1929)に、漁協の組合長を務めた長父子の尽力により、大型漁船を係留するための港湾整備が行われると、香住は近代的な港として一気に漁業が花開いた。特に最盛期であった昭和38年から昭和53年にかけては、景気の高さを伝える話が残っている。